

茂漁川

Moizari River

北海道



茂漁川は恵庭市の市街地を流れ、漁川に合流しています。茂漁川という名称は、「鮭が産卵する小川」を意味するアイヌ語の「モイチャン」が由来となっており、かつての茂漁川の様子を想像することができます。茂漁川は明治時代から農業用水として利用されるようになりました。昭和30年代には河川周辺の農地を洪水から守るために河川の直線化が行われ、コンクリートの護岸で固められた河道になりました。また、住宅地も急速に発展し、緑地空間の減少や河川の汚染が発生し、さらにはコミュニティの崩壊などもみられるようになりました。

その頃、恵庭市職員の活動により茂漁川を活かした川づくりの発想が生まれ、昭和62(1987)年に「水と緑のやすらぎプラン」が作成されました。こうして、川づくりが市のまちづくりの一環として取り組まれる体制がつくれられ、茂漁川は平成2（1990）年度に「ふるさとの川モデル事業」に認定されました。



茂漁川の原風景ともいべき未改修区間の景観
(提供: 中島興世様)



整備前 (提供: 札幌土木現業所)

「ふるさとの川モデル事業」では、土地利用や自然状態などに応じて、「水と緑の回廊ゾーン」「水と緑のくつろぎ空間ゾーン」「水と緑の散歩ゾーン」の3つのゾーンに分けた整備が行われました。まとまりのある自然林が残されていた中流部ではその樹木を活かし、また川が自由に流れるようにできるだけ川幅を広げるなど、治水機能を確保しながら多くの多自然型工法を取り入れた改修工事が進められました。なお、計画段階から市民と話し合いながら進められ、公園整備との一体化などまちづくりに組み込んだ河川整備が進められました。

川 幅が広げられた河川には、瀬・淵や州が形成され、流れが緩やかになり、周辺の樹林帯や旧河道と一体となった水と緑豊かな環境が復元され、潤いと安らぎのある景観が生まれました。川の中には、魚やチトセバイカモ(環境省レッドデータブック絶滅危惧種IB類)などの貴重な植物が見られるようになりました。

自然豊かで憩いのある川がよみがえり、子どもたちは川で遊び、遊歩道ではジョギングや散策を楽しむ人の姿が見られるようになりました。流域住民の環境に対する意識が高まり、生活環境の向上と文化的な住みよい郷土づくりを目指し、市民団体を中心となって環境教育や河川清掃など川の環境に親しむ運動を展開しています。

なお、茂漁川ふるさとの川モデル事業は、平成18(2006)年に「土木学会デザイン賞」で優秀賞に選ばれています。



チトセバイカモ



川に学ぶ総合学習（提供：荒閑岩雄様）



整備後の茂漁川（提供：荒閑岩雄様）